

仙波純一著

ガイドラインにないリアル精神科薬物療法をガイドする

吉益晴夫

新興医学出版社から、仙波純一先生による『ガイドラインにないリアル精神科薬物療法をガイドする』が上梓された。埼玉医科大学総合医療センターの神経精神科での、精神薬理連続講義のいくつか、「リアル精神科薬物療法」に取り上げられたこともあり、講義を直接に聴講した者として、その時受け取ったメッセージを思い出しながら、書き始めることとした。

扱われている疾患や症状は、実際の診察ではしばしば出会う疾患はもちろんのこと、統合失調症の抑うつ、産後精神病、高齢者の躁病、持続性抑うつ障害、醜形恐怖症、身体症状症、病氣不安症、アルコール使用障害の不眠、認知症の焦燥・攻撃性、ステロイド精神病、SLE 精神病など、新鮮な切り口のものも多く、臨床経験の長短にかかわらず、興味を持てるものである。

各項目は、1. 疾患の概念と診断、2. 治療の方針、3. 薬物療法についての系統的レビューやメタアナリシスと診断ガイドライン、4. 薬物の選択と投与方法、5. 薬物の副作用への特別な注意、6. 患者や家族に対する薬物療法の説明、7. 適応外使用の問題点、に分けて記載がなされている。薬物療法の説明、適応外使用が記載されていることは、類書にない特徴である。

説明するより分かりやすいので、書籍からの引用をお許しいただきたい。患者や家族に対する薬物療法の説明として、全般不安症には、「不安症の患者は一般的に身体の異常に敏感なので、容易に脱落しがちである。十分な説明(よくみられる副作用の症状

や1~2週間で回復することなど)とともに、最小用量から開始して漸増する」、PTSD および急性ストレス障害には、「患者が受け入れるかどうかにかかわらず、トラウマに焦点化した専門的な精神療法が最善であることを伝えるべきであろう」と薬物療法以外も含めた記載がある。適応外処方の問題点について、醜形恐怖症(身体醜形障害)では、「わが国では強迫症に対して fluvoxamine と paroxetine が、また社交不安症に対しては、paroxetine, fluvoxamine, escitalopram が適応症を有している。醜形恐怖症を強迫症とみなせば前者を、また社交不安症を伴っていれば後者を選択するのが合理的である」と記載されている。一部分の引用であるが、どのページを開いても、記載は簡潔でありながら、内容は深い。

辞書のように引いて読む本でもあるが、隅から隅まできちんと読むべき本でもある。何を知りたいか絞り込む、ガイドラインや質の良いレビューを探す、参考文献を実際にあたる、その研究がどのくらいの精度のものなのか見極める、という臨床で困ったときの、調べ方や考え方について、基本的な筋道を説いた教育的な本である。その都度手に取って見ることもできるが、時間が経った後で、もう一度読み直してみたい本でもある。新しく精神医学を勉強される方にも、最新の知識を整理したい方にも、ぜひ読んでいただきたい名著である。

(埼玉医科大学総合医療センター神経精神科)

●A5 変型 240 頁 2021 年 定価: 3,900 円+税 新興医学出版社刊